

第 10 回日展

第 4 科（工芸美術） 審査所感

審査主任 三田村有純

第 10 回展の応募数は前回よりわずかに減ったものの、エネルギー溢れる力作が多かったことは喜ばしいことである。外部の審査員二人を交えて 19 人で、鑑審査にあたっての意気込みなどを話し合うことから始める。作者の思いと努力に対して、尊敬の念を持ち、作品と真摯に向き合い、作品の良さを感じ取っていききたいとの思いで鑑査に入る。

立体、平面の入落を一審、二審、三審と日を重ねて行う。この間皆が一切無言で、作品と向き合い、良い作品への挙手を繰り返し行う。特選審査は二日間に渡って、なぜこの作品が素晴らしいかについての討論を重ね、最終的には投票をすることで 10 点に絞り込む。今年は作品のレベルが拮抗しており、次点になった作家の次回作に期待する次第である。

工芸美術は伝統的な素材と表現が多岐に渡る中で、新しい素材や、鮮やかな色彩など今までに無い展開の作品が見受けられ、新しい息吹を感じることができ、新入選も多かったことは頼もしいことである。また海外からの応募、入選もあり、日展の工芸美術が国内のみならず、広く世界で認知されていることを誇らしく思う。

搬入数 605 点

入選数 434 点

(内新入選) 31 点